

令和元年6月19日現在

機関番号：12201

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K13456

研究課題名(和文) 共感の反社会性と「いじめ」、偏見、紛争：異分野融合研究による教育モデルの提言

研究課題名(英文) Antisocial nature of empathy and its relation to bullying, prejudice, and conflict: Toward a model of educational measures by interdisciplinary study

研究代表者

中村 真(nakamura, makoto)

宇都宮大学・国際学部・教授

研究者番号：50231478

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：共感の反社会的側面に光を当て、心理学、文学・文化論、国際関係論の知見と方法を融合することによって、個人から国家にわたる様々なレベルの人間行動において生じている敵対的行動の機序の一端を解明し、問題解決に資する教育モデルを提案することを目的として研究を計画した。当初の計画通り、小中学校におけるいじめ、アメリカ文学における人種差別、紛争における偏見や差別と、これらの背景にある共感性や諸感情の関係について検討し、学会報告、学術論文、書籍として発表した。さらに、これらの成果を開かれた研究会やセミナーとして公表するとともに、研究授業として大学の講義において活用した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

いじめに対応する能力として、共感が一定の役割を果たしていること、文学において、差別する側とされる側とで黒人コミュニティに対する描き方が異なり、両者を比較しながら読むことが重要であること、外国人差別が集団間紛争を促進する効果があり、移民や難民流入に対するヘイトスピーチや排外主義の顕在化などとも結びついていることなどを解明し、このような問題に対応するために、道徳的判断の種類を考慮した教育内容の提案を含む、教育モデルの提案を行い、学会報告、学術論文、書籍として発表した。さらに、研究成果を開かれた研究会やセミナーとして公表するとともに、研究授業として大学の講義において活用した。

研究成果の概要(英文)：By focusing on the antisocial nature of empathy, and combining knowledge and methods of psychology, literature and cultural studies, and international relations, we aimed at elucidating the mechanism of the antisocial behaviors occurring in various levels of human behavior across individuals and nations, and proposing an educational model that contributes to tackling such issues. As originally planned, we examined bullying in elementary and junior high schools, analyzed the racial discrimination in American literature, and examined the relationship between prejudice and discrimination in conflict and the empathy and emotions behind it. We presented the findings as conference reports, research articles, and book chapters. Furthermore, we published these results at open research meetings and seminars, and used them in university lectures.

研究分野：感情心理学

キーワード：共感 反社会性 いじめ 紛争 異分野融合 教育モデル

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

昨今の日本と東アジア近隣諸国との間に生じている国民感情の悪化とそれに伴うヘイトスピーチや暴力行為のような、社会的共生を脅かす敵対的行動の背景には、心理的、文化的、社会的領域にわたる様々な要因が関わっている。伝統的学問分野において個別に検討されてきた様々な敵対的行動を包括的に再検討することにより、問題の背景となる機序を総合的に理解するとともに、効果的な対応策としての教育モデル提案を目指すこととした。

2. 研究の目的

本研究では、「共感は社会的共生を促進するか」という問いを立て、主として共感の反社会的側面に注目することとした。すなわち、身内や内集団に対して共感的であるがために、他者や外集団に対して敵対的にふるまう可能性を検証することを試みた。具体的には、研究組織のメンバーがこれまでに取り組んできた、学校における「いじめ」、アメリカ文学における人種差別と偏見、武力紛争における偏見と差別など、個々の学問分野における研究を、共感の反社会的側面に注目して深化させ、ミクロレベルの共感が様々なレベルでの敵対的行動とどのようにかかわっているかを明らかにし、さらに、その結果を踏まえて、現実が生じている問題への対応策として、問題解決に資する教育モデルを提案することとした。

3. 研究の方法

心理学、文学・文化論、国際関係論の分野で優れた実績を持つメンバーが、専門分野における課題を設定しつつ、分野の枠を超えて融合的に共感の反社会性という問題に取り組むこととした。個人や小集団レベルの問題としての「いじめ」については主として心理学の観点から、より規模の大きい集団レベルの問題としての人種差別や差別撤廃運動については、主として文学・文化論の観点から、さらに、国際的な解決が必要となる問題としての武力紛争の背景やその解決のための取組みに関しては、国際関係論・国際機構論の観点から検討することとした。また、これらの問題の基盤をなす感情と共感性については、主として心理学の観点から検討した。

4. 研究成果

共感の反社会的側面に光を当て、心理学、文学・文化論、国際関係論の知見と方法を融合することによって、個人から国家にわたる様々なレベルの人間行動において生じている敵対的行動の機序の一端を解明し、問題解決に資する教育モデルを提案することを目的として研究を計画した。当初の計画通り、小中学校におけるいじめ、アメリカ文学における人種差別の分析、紛争における偏見や差別とその背景にある共感性や諸感情の関係について検討した。それぞれ、いじめに対応する能力として、共感が一定の役割を果たしていること、文学において、差別する側とされる側とで黒人コミュニティに対する描き方が異なり、両者を比較しながら読むことが重要であること、外国人差別が集団間紛争を促進する効果があり、移民や難民流入に対するヘイトスピーチや排外主義の顕在化などとも結びついていることなどを指摘した。また、このような問題に対応するために、道徳的判断の種類を考慮した教育内容の提案を含む、教育モデルの提案を行い、学会報告、学術論文、書籍として発表した。さらに、これらの成果を開かれた研究会やセミナーとして公表するとともに、研究授業として大学の講義において活用した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 5 件)

石川隆行・中村真・米山正文・清水奈名子・澤田匡人 (2018). いじめ場面における中学生の行動と言語的援助要請スキル, 援助不安および共感性の関連 道徳性発達研究 12 巻 25-32.(査読有)

米山正文 (2017). レデリック・ダグラス自伝(1855)における Manhood - 19 世紀アフリカ系アメリカ人作家と人種偏見 - 宇都宮大学国際学部研究論集 43 巻 91-106.(査読無)

中村真・清水奈名子・米山正文 (2017). 「排斥的行動」に対応するための異分野融合研究の可能性 - 共感の反社会性を踏まえた教育モデル構築に向けた試論 - 宇都宮大学国際学部研究論集 43 巻 63-82.(査読無)

〔学会発表〕(計 9 件)

Shimizu, N. (2017). 'R2P, POC and the United Nations Security System: The Limits of the Intergovernmental Organization' The 7th Annual Conference of Japan Association of Human Security Studies (招待講演)(国際学会)

Nakamura, M., Shimizu, N., & Yoneyama, M. (2017). Interdisciplinary Research on Responding to Acts of Social Exclusion. 4th Annual Conference of European

philosophical society for the study of emotions. (国際学会)

〔図書〕(計 4件)

清水奈名子 (2018). 「人道的介入は正当か」(日本平和学会編『平和研究 14 の論点』)
法律文化社
今田純雄・中村真・古満伊里 (2018). 感情心理学 感情研究の基礎とその展開 培風館

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名： 米山正文

ローマ字氏名： Masafumi Yoneyama

所属研究機関名： 宇都宮大学

部局名： 国際学部

職名： 教授

研究者番号(8桁)： 80323319

研究分担者氏名： 清水奈名子

ローマ字氏名： Nanako Shimizu

所属研究機関名： 宇都宮大学

部局名： 国際学部

職名： 准教授

研究者番号(8桁)： 40466678

研究分担者氏名： 石川隆行

ローマ字氏名： Takayuki Ishikawa

所属研究機関名： 宇都宮大学

部局名： 教育学部

職名： 准教授

研究者番号(8桁)： 50342093

研究分担者氏名： 沢田匡人

ローマ字氏名： Masato Sawada

所属研究機関名： 学習院女子大学

部局名： 教育学部

職名： 准教授

研究者番号(8桁)： 40383450

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。